

令和6年度 沖縄県立看護大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム 自己点検・評価結果

沖縄県立看護大学  
IR・データサイエンス教育推進委員会

自己点検・評価体制における意見等

点検項目	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和6年度において、情報学の履修者は29名であり、28名が単位を取得した。1名は休学のため未修得となった。開講学年における情報学の科目の選択率は35.8%であった。令和8年度までは選択科目とする計画であり、科目の選択率を高めるために、新入生や在对学生に対する新年度ガイダンスや学生向けメール、関連授業科目などで、今後の社会において必要となる「データサイエンス」を教授するプログラムを設置していることについての呼びかけを行い、当該科目を積極的に履修することの動機づけを行う。
学修成果	授業後アンケートの質問項目「本コースの参加前後を比較して、あなたの中で変わったこと」の記入内容として、「情報に対する考え方が変わった」「Excelなどの技術を知り、データや数値などを分かりやすく表示することができるようになった」「情報収集や分析の仕方、情報学や統計学の歴史など学が前は全く知識がなかったが、授業を通して、知識を身に着ける事ができ、チーム力のことや、論文の書き方なども学ぶことが出来た」といった回答が得られ、データサイエンスやその知識の活用についての学修成果が得られたことが確認できた。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	授業後アンケートの質問項目「本コースで学んだ内容を、これからの自分の活動(勉強や仕事、研究など)に活用したいですか?」に対して、「活用したい」と回答した学生が100%であった。一方で、「本コースで学んだ内容を、これからの自分の活動(勉強や仕事、研究など)に活用できる自信がありますか?」に対しては「自信がある」と回答した学生は53.8%、「どちらともいえない」と回答した学生は46.2%であった。活用する自信について「どちらともいえない」と回答した学生の回答理由として「理解することが難しかったものがあったり、看護の現場でいかせそうなものがあるかはわからなかったから」「自分のキャリア、学業に活かせるか実用的なイメージがまだ沸いていないため」などがあった。改善に向けた取り組みとして、今後の学生生活とのつながりや、医療職とデータサイエンスのつながりをより具体的にイメージできるように授業内容や演習課題を設定する予定である。
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	授業評価アンケートにおける満足度調査(4件法、1=全く当てはまらない、4=非常に当てはまる)の結果、「授業の要点がわかりやすい展開であった」は3.57、「私は、授業から知的刺激を受けた」は3.57、「教員の説明は具体的にわかりやすかった」は3.57、「教員は、学生の理解度を考慮しながら授業を進めていた」は3.71、「教員は、質問の機会・方法を設定し、質問に適切に回答した」は3.71と、授業に対して肯定的な評価が得られたことから、推奨度の高い講義であることが伺える。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和6年度は、2年次の選択科目として開講したため、2年次の履修者は34%(学生82名中28名)に留まった。令和7、8年度も選択科目として開講するが、履修率を向上させるためにガイダンス等で履修の推奨を行う予定である。令和9年度以降は必修科目とすることを検討しており、履修率100%となることを目指す。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	現時点では修了者の評価は行えていないが、プログラム修了者の卒業後の調査を実施し、その活躍状況を評価するものとする。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	学生の主な就職先は医療機関の看護師であり、本プログラムの内容・手法等に関する意見を医療機関から直接的に得ることは難しい。プログラム修了者の卒業後の調査において履修生本人からの意見を収集するとともに、医療業界の動向を注視し、両視点から教育プログラムの改善に繋げる予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	データサイエンスやAIの産業界での活用例だけでなく、学生にとってイメージしやすい医療現場での活用例を多く取り入れることや、他の看護系の講義で学んだ知識を活かせるような演習を用意することで、数理・データサイエンス・AIが看護や保健の実践に役立つことが実感できるようにし、学ぶ楽しさや意義が感じられるよう工夫をしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	健康データを分析する演習において、使用する分析ツールや手法を毎年度見直し、技術の発展を反映した授業内容となるよう毎年改善している。